

彼女は初恋の経験をしたので、K君と別れる心は起きなかった。その後彼女は一週間京都に止まったので、何故自分の家業を継がないかの理由を尋ねてみた。彼女は静かに過去を顧みつつ、小さい時から家を継ぐのだと口癖のようにいわれていたので、その反動として家を継がないぞと考えるようになった。家の仕事が好きではないと話してくれた。

私は彼女に両親がどのようにして育ててきたかを静かに話した。まづ大学進学について両親は何等の反対もなく、心よく大学生活を送らせてくれた。四回生の時に西欧諸国の独り旅も許してくれた。他人の所で働くことも認めてくれた。このように長女としての我俣を全面的に許してくれたのは大人として取扱ってきた証拠である。長女が跡を継がなければ次女（保母）も外に出てゆくだろう、三女（洋裁見習）も二人の姉が自由に生活したので、何故末子が跡を継がねばならぬのかというであろう。こうなれば、この家は両親限りで分散しなければならぬ。

人として、愛情を求めえたことは幸福であるが、一家分散したり、他人（養子）が代って経営した時、姉妹はどのようなことになるだろうか。愛と現実生活の中で、可能な道を求める以外に方法のないのを互に夜遅くまで話し合ひしたが、彼女は最後まで決心しかねて帰郷した。

（つねかわたけとし 社会学部教授）



## 随筆

### まぼろしか

久下 陸

国鉄山陰線の車窓に野の煙のにおいが流れこむと、乗客はみないいあわせたように話をやめて窓の外をながめ、しばしその匂いにひたるのである。

このとき、私の心は遠い昔の路線に走り込み、幼い日々の光景を追いかける。泥んこになって灯ともしごろまで野中を飛びまわり、そのあげく、わが家の暗い電灯の下で夕飯をかきこんだ日々のことを。

ゴトン、ゴトンと揺れる車の響きの中で、忘れていた歌を口ずさんでいる。

里わのほかげも 森の色も

田中の小路を たどる人も

かわずのなくねも かねの音も

一つが終るとまた別の歌を……。そうしていつも最後にたどりつくのは『赤とんぼ』の歌である。歌い終ったとき、ふと胸にあふれるものがある。この歌はそんな魅力をもっている。それはどこから来るのか。

夕やけ小やけの あかとんぼ

負われて見たのは ひとつの日か

ねえやの肩ごしに見たあの赤とんぼはもういない。ふるさとの山河は色あせ、昔の面影はもはやどこにもない。ただ夢幻の中に懐しさが残るばかり。

山の畑の 桑の実を

小籠に摘んだは まぼろしか

桑の香はあおくだよい、かごの小粒の甘ずっぱい味が口の中にひろがる。だが、それらはもう、わが身にはかえって来ない。野山の輝きは消え、それを見た澄んだひとみも光を失った。みんな幻だったのか。

乳飲み子に両の手を差し出して、いくらおいでをしても抱かれに来ない。ただ

背中を向けたとき来てくれる。それが子どもである。背中の子どものとりで。ねえやはゆりかご。それさえ、はかなくなくなってゆく。

十五でねえやは 嫁にゆき

お里のたよりも 絶えはてた

十五で……とは何か不幸の予感がする。

果たして頼みの糸も切れ、心の支えも崩れてしまう。もはや、何もかも消えてしまったのだ。

歌がここで終っていたなら、われわれは幻の世の哀愁に泣き、空無の感傷に涙するばかりである。

だが、作者 三木露風はそうしなかった。もう一度目をあげ、青空を仰ぐのである。それは懐旧の情にうるみ、消え去ったものの影を追うひとみではなく、きらりと光り、現実を見定めようとするまなざしである。

夕やけ小やけの 赤とんぼ

とまっているよ 竿の先

きらきらと、夕日を浴びて羽を光らせ、赤とんぼは、ほれ、今、そこにいるでは

ないか。

わが国の仏教の根っ子には天台の教えがある。それは空**仮**中の三諦によってこの世の悲しみを深くつきぬけることを教えてくれた。その眼光は日本文化の歴史の流れの底を貫いて来た。一心三觀の法輪はこの世の空しさ、無常のはかなさをつきつめた末に、それを逆転する。その支点は仮觀である。そのことをこの歌の作者は知っていた。直接、天台の教学も仏教の哲理も学んだことはなかったろうが、その膚に沁み込んでいたのである。その觀照の目は、日本の心の風光が育ててきたのである。

われわれもまた、その目がとらえたものに涙を流す。そのなみだは感傷のそれではなく、諦觀に根ざし、日本の心の底を流れ、仏を觀するものの目の中に光りつづけてきたものである。

歌いすすめて、ここに至ったとき、純化された詩情は心の琴線にふれ、共鳴する。そのとき、われわれは潤む目で、わ

れとわが心の奥底をのぞき、そこに、み  
ほとけを見るのである。

(くげのぼる 文学部助教授)



インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。